（二〇一三年度）

9 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は24ページ、三問である。）

受験についての注意

一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
五、**解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**その他の部分には何も書いてはならない。
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

今、私のなかでは、俗に「心」と呼ばれる情景が拓(ひら)かれている。今にかぎらず、たえまなくそれは繰り広げられている。そしてこの心なるものの舞台となっているのが「意識」である。

意識は自明なものであり、普段はそれと意識されることはない。スクリーンのようなものといえばよいのだろうか。それ自体は姿を現さない。だがこの透明なベールとおぼしきものには、ある「裂開＝ラプチャー」(rupture)が、深く刻み込まれている。

生命の歴史を振り返るとき、[1]われわれ人類が途轍(とてつ)もない隘路(あいろ)をくぐりぬけてきたものであることに気づかされ、背筋に冷たいものが走ることがある。猿人から原人をへて現世人にいたる道筋には、累々たる種の屍(しかばね)が横たわっている。その間にどれ一つとして生き残った種はいない。こうした尖兵(せんぺい)たちの模索の果てに、ホモ・サピエンスという出口が見出されたのである。しかしそこに至る行程は、より適応的な種を生み出すための試行錯誤だったのだろうか。どうもそうではなさそうである。

進化の系統樹をみると、その流れは途中で大きく二つに枝分かれしている。一方は節足動物、他方は脊椎(せきつい)動物へと至る道である。ベルクソンは、エラン・ヴィタール(生のはずみ)に含まれている本能と知性が、そこで分岐したのだとしている。生命というものが、はずみを内包しつつも、自然と調和した円環を結ぶものだとするなら、生の本流は節足動物へと向かう分肢にあるというべきだろう。その頂点にある昆虫こそが、生物として、あるいは神の被造物としての完成品である。

他方の脊椎動物の分肢においては、「はずみ」は生自身をも逸脱するポテンシャルをはらみながら進展し、最終段階において、ついにそれを大きく踏み外す挙措にでた。自然との調和を結ぶのではなく、むしろ不調和へと迷い込む中で、血路を開くことに成功してしまったのである。ここに[2]生物としての奇形種である人間が誕生した。

地球物理学者松井孝典は、人間が動物として生息した場合、地球上で生息可能な数はせいぜい五千万頭だろうと試算している。この場合、「動物として」というのは、チンパンジー程度の知恵しか使わないという意味である。それであれば、むしろ生

息は困難であり、早晩絶滅せざるを得なかったのではないだろうか。

あらためて裸の人間をながめてみるなら、そもそもこれほどおかしな生き物もない。体毛は落ち、傷つきやすい肌が剥き出しとなり、唇はめくれ上がり、粘膜が露出している。膨大な量のエネルギーを産出するのに合わせて汗腺が発達し、一日に多量の水を補給しなければならない。わざわざ重力に逆らって、大きな頭を上に掲げ、ひょこひょことあやうい歩行をしながら移動している。

そして最も奇形的な逸脱をしたのは脳である。[3]この腫瘍まがいの臓器が、人間をして、生命を含めた自然から離陸させたのである。

それまでの生命史では、身体の暴走はもっぱら性や抗争にかかわる部分で起きてきた。そして大抵は絶滅への道をたどった。たとえば角や牙が過度に大きくなったオオツノジカやサーベルタイガーなどである。もちろんすべてが絶滅したわけではなく、孔雀のような例外もある。これらは暴走とはいえ、異性を獲得するという生にそった流れの中で起きたものである。では脳はどうなのだろうか。

[4]脳科学の隆盛によって、かつてこの臓器にまとわりついていた漠たるスティグマ(負の烙印)は洗い落とされた。それはそれで意義のあることだろう。かつては「脳の病気」というフレーズが、すでにして社会的死の宣告であった。今や臨床の現場では、「脳」という言葉は実に気軽に使われるようになり、必ずしも患者を不安に陥れるものではなくなった。むしろ病のありかが特定されて、安心することもまれではない。

しかし「脳がわかればすべてがわかる」、「脳ってすばらしい」などといったたぐいの単細胞的な発言が横行する中で、[5]この奇形的な臓器がその宿主である人間に対してもっている禍々しさまでもが忘れられようとしている。

脳は大食漢である。わずか一・五kgにみたぬ臓器が、全体のエネルギー源の五分の一を消費する。しかもグルコース以外は受け付けないという偏食漢である。そして惰眠をむさぼる。単に長い時間を要するだけでなく、あられもない姿態を曝け出す。レム睡眠を時間の片隅に追いやって新しく開発されたノン・レム睡眠は、おそらく巨大化した脳を休めるためのものであ

り、深い眠りに人をいざなう。外敵に襲われればひとたまりもなく、どのような豪傑も寝首をかかれる危険を免れない。

さらに問題は、そのボリューム自体にある。巨大化し、行き場を失った頭をどうすればよいのか。ここで生き延びるために、人類はとんでもない挙措にでた。つまりは二足歩行である。もてあました頭を、あろうことか、てっぺんに掲げたのである。脳の巨大化と二足歩行、この二つはともにそれだけで、途轍もなく自然から離反している。それを二つ掛け合わせるという、破れかぶれの、ほとんど暴挙といってもよいものが、[6]たまさか新しい舞台を切り拓いてしまったのである。

こうした人間の反自然性は、生命の最も根幹の部分に[7]重大な影響を与えることになった。直立することにより、骨盤が狭くなったのである。大きな脳に狭い骨盤腔、この取り合わせが生命の連鎖に致命的な影響を与えることはすぐにわかるだろう。お産が大変になったのである。難産は人類にとって、自然に反して生き延びたことに対する対価であり、同時に、それ自体が生き延びることを危険にさらすものだった。そして今なお、大きな関門として立ちはだかっている。

幸運にして無事に産道を通過したあとにも、まだまだ多くの困難が待ち受けている。赤子は、およそ他の動物では考えられないほどの未成熟な状態で生まれ落ちる。いわゆる「早生」と呼ばれるものであり、早く世に出すぎたのである。

もっと長い時間をかけて母の胎内で育まれるべきだったのであるが、そうもいかない事情がある。ぐずぐずしていると、頭がさらに大きくなり、外に出られなくなってしまうのだ。どれくらい早すぎるのか。オランウータンの赤子と同じレベルに達するのは、生後九カ月くらいといわれている。まさに行程半ばで産み落とされてしまうのである。

生まれ落ちた赤子が自分の命をつなぐために出来ることといえば、呼吸と、そして泣くことぐらいである。脳がコントロールできるのは、せいぜいこれくらいの領域にとどまる。移動もできなければ、哺食(ほしょく)もできない。このまったくの無力(helplessness)が、人間の生の一番初めに刻み込まれている。子宮内の生が、かつて信じられたほど満ち足りたものではないにしても、[8]出生はまどろみからの覚醒であり、目に見える最初の「裂開＝ラプチャー」である。

ではどこへ覚醒するのか？　この覚醒の道行はどこに至るのだろうか？

そこに見出されるのが、まさに「自己」と呼ばれるものである。それは意識の系統発生が最終局面で産み落としたものであ

り、みずからを叩き起こした裂開の傷をそれ自身の中に携えている。

自己とは創発されたものであり、[9]脳の中の幽霊のごときものである。それはあたかも、種の起源に存在する不調和、壊乱、逸脱を、一点で束ねるかのごときものとして呼び起こされた。巨大な脳のうごめき、流動してやまない事象の流れの中に、それ自体は何ら実体もなく意味もないものが、鎮座することになったのである。

[10]今、この自己は大きな岐路に立たされている。それが最もまぶしく、かつ危険をはらんだものだった時期はすでに過ぎ去った。それは系統発生的には近代(モダン)であり、個体発生的には青年期であった。だが、近代はほぼ終焉し、それとともに青年期もその役割を終えた。自己は自明性のまどろみの中に沈もうとしている。

では、自己はどこへ向かおうとしているのか。このままどろみこんでしまうのか。それとも新たに覚醒するのだろうか。もしそうだとするなら、どこへ目覚めるのか。

この大いなる地殻変動の胎動はすでに始まっている。

(内海健『さまよえる自己』)

〈注〉 ベルクソン…フランスの哲学者。　レム睡眠…睡眠の一つの型で、身体は眠っているが脳は覚醒に近い状態の睡眠。夢を見ていることが多い。　ノン・レム睡眠…レム睡眠以外の睡眠状態で、脳波にゆるやかな波が現れる深い眠り。成人では一夜の睡眠の八割を占める。

問一　傍線部1はどのような意味か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　意識という透明のベールと思われるものに、ある「裂開」が深く刻み込まれているということ。

b　脊椎動物の分肢において、自然との調和を結ぶことはせず、不調和へと迷い込み、血路を開いてしまったということ。

c　見た目のいびつさによく表れているように、人間がきわめておかしな外見の生物に進化してしまったということ。

d　ホモ・サピエンスに至る進化の過程で、他の数多くの種が滅びてしまったのにもかかわらず、人類が生き残ったこと。

問二　傍線部2の説明としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　人間とは、自然との不調和の中で、逆に生存の可能性を見い出した生物である。

b　人間とは、身体の暴走によって抗争ばかりを起こし、絶滅の危機にある生物である。

c　人間とは、チンパンジー並みの知性しかないのに、その能力以上に多数生息する生物である。

d　人間とは、進化の途中で枝分かれした節足動物のように自然と調和して生きる生物である。

問三　傍線部3はどのような意味か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　脳という不可思議な発達を遂げた臓器のせいで、人間が自然から逸脱するようになってしまったということ。

b　脳という臓器の指令によって、人間が他の生物を食糧とするようになり、多くの生物種が絶滅させられてしまったということ。

c　脳という臓器が必要以上に発達してしまい、人間が自然界に居場所を見い出すことができず、存亡の岐路に立たされているということ。

d　腫瘍が生じやすい臓器である脳のせいで、人間が自然界の調和を乱し、他の種との交流が不可能になってしまったということ。

問四　傍線部4はどのような意味か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　脳科学に関する著作が連続して出版されるようになり、数多くの人々が脳のしくみに関心を持ち、理解を広げるようになったということ。

b　脳に関する研究が進み、脳の働きに障害があったとしても、差別の対象になったりすることがなくなったということ。

c　脳の巨大化ゆえに、人間は自然の摂理に反し、しかたなく二足歩行をするようになったことを人々が受け入れたということ。

d　大きな脳ゆえに、人間のお産が困難を伴う行為に変わったということを誰もが認めるようになったこと。

問五　傍線部5は具体的にはどのようなことを指すのか。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　脳が巨大化し、人間が高い知能を手に入れた結果として、人間が自然から大きく遠ざかり、他の生物と比べ奇形種のようになってしまったこと。

b　脳に関する誤解をはびこらせるような言説が流布してしまい、脳について語ることが今でも難しい状況にあること。

c　脳が巨大化したせいで、人間の身体の暴走に拍車がかかり、戦争が繰り返されるだけでなく、人類滅亡の危機さえ危惧されるということ。

d　脳があまりに大食漢で、無駄な睡眠をむさぼりながらも、一方で「脳ってすばらしい」という単細胞的な発言が横行していること。

問六　傍線部6はどのような意味か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　たまたま起こっただけなのかもしれないが、脳の巨大化が引き起こした身体上の変化によって人間は神の領域へと一歩近づいてしまった。

b　意図したわけではないのだが、脳の巨大化と二足歩行の影響で、人間は他の生物たちとは異なる行動原理を持つ生物になってしまった。

c　偶然の結果なのだが、人間は二足歩行を行うようになり、しかも頭部を身体のてっぺんに載せることに成功したのである。

d　意図したわけではないはずだが、脳を巨大化させた人間は、他の生物よりも不自然で、芝居がかった行動様式を身につけるようになってしまった。

問七　傍線部7「重大な影響」と見なすことができないものを一つ選べ。

a　長く深いレム睡眠が必要になってしまったこと

b　自然に対する「無力」が生の初めに刻み込まれたこと

c　人間のお産が難産になったこと

d　胎内で育つ時間が短くなってしまったこと

問八　傍線部8はどのような意味か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　赤子は母の胎内では睡眠しながら過ごすことが多いが、難産の末に出生すると、無力感にさいなまれること。

b　母の胎内で長い時間過ごすことが不可能となり、いきなり厳しい社会生活へと放り出され、安らぎの時期と断絶させられてしまうこと。

c　人間は出生によって胎内での安らかな時間から目覚めさせられるが、その結果として、それ以前の状態とは断絶が生じるということ。

d　人間は出生とともに「自己」に目覚めるのだが、そこには種の起源に存在する不調和や逸脱などが最初から含まれているということ。

問九　傍線部9はどのような意味か。もっとも適切なものを一つ選べ。

a　脳の中で浮遊し、人間を常に恐怖に陥れるようなもの。

b　移動も哺食もできないという無力感を脳内に刻み込むようなもの。

c　意識の系統発生が最終的に産み出した機能を持たないもの。

d　人間に内在する不調和を束ねるが、それ自体は脳の中で実体を持たないもの。

問十　傍線部10のように筆者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　現代人の多くは今、自己の喪失感を味わっているから。

b　自己がまどろんでしまうのか、覚醒するのか、定かではないから。

c　自己とは、何ら実体も意味もないものだから。

d　自己とは、自らを叩き起こした裂開の傷を内部に抱えているから。

問十一　本文の内容に合致しないものを一つ、次の中から選べ。

a　人類が早期に絶滅しないですんだのは、高い知性を持ったからだと言える。

b　かつては「脳の病気」というフレーズは社会的死の宣告を意味したが、その状況は現在では大きく変化したと言ってもよい。

c　意識には「裂開」が刻まれているが、その「裂開」ゆえに今、自己が大きな岐路に直面している。

d　試行錯誤の結果として人類がより適応的な種になったようには思えない。

二

次の文章は明治三十五年に刊行されたレトリックの概説書からの抜粋である。これを読んで、後の問に答えよ。

かの『源氏物語』中の名高き一節に、さる婦人の言として、

声もはやりかにて言ふやう、「月ごろ風病にて重きに耐へかねて極熱の草薬を服していと口臭きによりてなん、え対面たまはらぬ。目のあたりならずともさるべからん雑事等はうけ給はらん」と、いとあはれにむべむべしく言ひ侍り。

などいへるたぐひは、日本語格の中に漢語を挿入せるより起こりし文章上の欠点なり。[1] 勿論作者はこれを滑稽の意にて描けるなれば、その欠点あるところが文の妙なる所以なれども、[2] さる場合とここに論ずるところとは観察点を異にす。『源氏物語』はこれを詞藻として用ひたるものなれば、その語趣に基づける語彩法として、これらの漢語の背景たる学者、荘重などいふ情趣を利用し、これを前後の女性的凡俗的なる語格情態と対照せしめて、学者ぶる女、荘重なる女性、不釣合、不相当などいふ感を刺戟せんとせるものなり。されど若しこれらの事情を離れて、真面目にかくの如き文辞を用ふるものありとせば、これ文章中に国語的慣例の文脈と調和せざる外国語を挿入せる不純正の弊に陥れるものなり。

外国語といへども熟して標準語の中に入れるものなるときは、不妥の念消えて、穏当なる平叙文と見らるるに至る。数学書生が零といふべきを「ゼロ」といひ、加減といふべきを「プラス、マイナス」といふが如き、又世間にて洋灯を「ランプ」といひ、煙草を「タバコ」といふが如きは、殆ど熟して国語の慣例内に入れるがため不純粋といふべからざることあり。「云々となり得るの素あり」といふべきを「云々のポッシビリチーあり」といふは繁を避けて簡に就けるの効により不純正の嫌を掩へるものなり。[3] 哲学上、儀範、範疇、儀表などいはずしてカテゴリーといふの、[4] その社会には解し易きが如き、また適当なる訳語なき場合に於ける同一の例たり。

その他「極めて妙なり」といふべきを「極めて妙了」といひ「人間は神の子なり」といふべきを「人間はゴッドのサンなり」といふが如きは弊なり。[5] ただ我が国語と漢語とは歴史上特別の関係を有するが故に、一概に漢語混入を以て国文の純正を害する者とは言ひがたし。巧に漢語を国文格中に挿入して調和せしむるを得ば、寧ろこれを用ひて国文の欠点を補ふ可きなり。漢語と国

文との関係は例へば英国文と羅典語、仏語等との関係などと異なる所あるや勿論たり。

次には外国の句法文格によりて国文を綴りしが為に不純正の弊に陥れるもの。[6]但しこれまた現時のわが文壇にては全く批難し得ざる事情なきに非ず。蓋しわが国目下の文章は、正に衆美を集めて改善の途に上るべき潮境にある者なれば、外国の文格も調和し得ん限りはこれを取り入るるを妨げず。即ち慣例の未だ確定せざる状態なり。殊に外国の句法といふうちにも、漢文格と国文とは別様の関係あることなほ漢語の場合に於けるが如くなれば、今日の漢文体の如きは、必ずしも拒斥するを得ず。ただ進歩せる鑑識よりいふ時は、甚しき漢文直訳体などいふものは望ましき者にあらず。[7]又洋文の句法を国文に乱用するの弊は今日の文章界に最も大なり。「死に就けり」といふべきを「死によりて迎へられたり」といひ「楯に載りて、還らんと本国を立ち出でぬ」といふべきを「楯に戴せられて還るべく本国を見棄てぬ」などいふは文品如何にも雑駁且つ幼稚にして見にくし。

是等みな吾人がこれを修辞上の弊と感ずるの理は、上に言へる所と同一なり。随つて勢力ある人がこれを用ひしため、又はその他の事情によりて遂に世に行はれ、人耳に熟するに至れば、その不純正と見られしものもおのづから移りて純正と見らるるに至るべし。この際に於ける標準は時と共に遷転すべきものたること勿論なり。上の例に於いても「死によりて迎へられたり」などいふ句法は、本来日本の句法中非情物、殊に[8]無形なる「死」などいふものを人化してはたらかしむることの少なきと、「迎へらる」などいふ所動的描写を用ふること少なきとによりて、当初こそ不調和にも聞こえたれど、今日にては早くすでに人耳に熟せんとするに至れり。

（島村抱月『新美辞学』）

〈注〉 詞藻…文章の内容や表現に対して施されるレトリックの総称。　不妥…適当でないこと。妥当でないこと。　非情物…木、石などのように心の動きを持たない存在。

問一　傍線部1はどのような「欠点」か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　普通ならば和語を用いるべき場面で、学者が使うような固い漢語表現を多く交え用いたことによる欠点。

b　日本語で答えるべき質問に対して、外国語を用いて、あえて通じぬように答えたことによる欠点。

c　和語を用いたレトリックではなく、荘重な漢語を多用するレトリックを使用したことから生じる欠点。

d　日本語の文法に基づかず、外国語の文法に依った言い回しを登場人物にさせている欠点。

問二　傍線部2について、なぜ「その欠点あるところが文の妙なる所以」なのか。次の中からその理由としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　場にそぐわない外国語を使うことを通して、当時の女性のコミュニケーション能力の実情を強調しているから。

b　筆者がこの文章で問題にしているのは、場に不相応な語彙を使用することによる表現上の効果についてだから。

c　『源氏物語』の文章には拙いところもあるが、学者ぶる女性の滑稽さを描いている点は効果を上げているから。

d　一般的な女性とは異なる用語の選び方をする滑稽さを通して、その女性の性格を読み手に印象づけているから。

問三　傍線部3はここではどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　用語の選択に純粋さを欠いていても、許される。

b　外国語を交えても、用語の不統一が目立たない。

c　外国語を用い、統一性が取れていない。

d　安易に、用語の選択を行う態度が見られる。

問四　傍線部4は、ここでは何を指すか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　文体的に不統一でも外国語の利用をあえて行う集団

b　抽象的な外来語で議論を行うようになった言論界

c　哲学について研究する人間の集まり

d　近代化を目指す明治の世の中

問五　傍線部5のように筆者が述べるのはなぜか。次の中からその理由としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　西洋から入った外来語と異なり、日本語の文章の中で漢語を用いるようになった歴史は古いので、場面や内容に即した使い方をするのなら、かえって漢語を用い、簡潔な文章表現を目指す方がよいと考えられるから。

b　中国文化の影響を古来から強く受けた日本において、漢語を交えずに日本語の文章を書くことは難しく、漢語が混入していることをもって非難するには無理があるから。

c　英語を不用意に日本語に交えると分かりにくい文章になるが、漢語の場合は漢字で表記されることもあり、必ず読みにくい文章になるとは限らないから。

d　英語におけるラテン語やフランス語の借用と同様に、日本語が漢語を利用するには固有の必然性があり、その妥当性は漢語の可否ではなく、漢語がどのように利用されているかという観点から考えるべきであるから。

問六　傍線部6のように筆者が述べるのはなぜか。次の中からその理由としてもっとも適切なものを一つ選べ。

a　西洋の文章を模範として、言文一致体のような文章を目指すことがこの当時の風潮であったので、それを非難するには当たらないから。

b　この当時は、外国語学習が盛んになってきた時期なので、外国語の調子を日本語の文章の中で応用する動きを押しとどめることはできないと考えられるから。

c　外国の文章のスタイルの中でも、この当時流行した西洋の文章を模範とすることは避けなければならないが、漢文の調子を利用することは、これまでの歴史から見ても、妥当な方策だから。

d　この当時の文章はそのスタイルがいまだ模索されている最中であったので、外国の文章の調子を日本語に取り入れる試みも、文章全体の調和を乱さないものならば、不適当とは必ずしも言えない状況であったから。

問七　傍線部7はここではどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　西洋の文章を日本語に移しかえる際に、分かりにくい直訳的な翻訳を行う弊害。

b　西洋の文章を意図的に冗長な表現に置き換え、それを日本語の文章に利用する弊害。

c　西洋の語法をそのまま直訳し、それを日本語の中で頻繁に用いる弊害。

d　西洋の語法を利用することは日本語に定着する可能性がないものであるのに、それを敢えて行う弊害。

問八　傍線部8はここではどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　形を持たなくなる「死」のような悲劇的な状況をさかんに文章の素材として用いる。

b　抽象名詞である「死」のような語を擬人化して「迎ふ」のような行為の主として扱う。

c　抽象名詞である「死」のような語を人々にとって耳慣れた表現となるよう活用する。

d　形を持たなくなる「死」のような存在を人のような形ある存在と誤解して文章中で利用する。

問九　次の文章のうち、本文の趣旨に合致すると思われるものを二つ選べ。

a　『源氏物語』は女性に漢語を使わせることにより、凡俗的な女性を教養ある女性と比較しながら批判的に描いている。

b　数学を学ぶ学生が「ゼロ」や「プラス、マイナス」といった外来語を用いることは、そのような場ではすでに熟した表現となっているので、用語法として非難するには当たらない。

c　漢文直訳体は、文章のあり方について進歩的な立場をとる人間からみれば、到底容認できる文体ではない。

d　純正ではないと感じられる日本語の表現も、力のある者がそれを用い、人々にその表現の使用をうながせば、最終的には純正なものとして意識されるようになるのが一般的傾向である。

e　日本語では「迎へらる」のような受動的な表現が使われることはこれまで少なかったが、西洋の語法が日本語の文章に移入され、それが耳慣れたものになるに伴い、違和感が大分低減してきた。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

身ぶりで何かの意味を人に伝えることができるのだから……という理由で比喩的に「身ぶり言語」という呼びかたをすることが多い。映画や劇画・漫画などについて「映像言語」という場合と同様の意味だ。あるいは「花ことば」などとも共通するだろう。

記号過程あるいはコミュニケイション手段としては「言語」がいちばん上出来のものだろうから、類似品にその名称が流用されるのはもっともである。と同時に、言語以外の記号現象について考える場合に、基準というか、きっかけというか、とにかく点検のためのチェック・リストとして言語体系がモデルとなるのもうなずけることであって、[1]「身ぶり言語」についてもまた「言語」をひきあいに出して考えると好都合なのだ。

その身ぶり言語が言語ともっともことなる点は、おそらく「発信」量と「受信」量のアンバランスであろう。

合理的記号学を体系化しようとしているルイス・プリエトなどの「記号学派」によれば、記号とは何よりもまずコミュニケイションのためのものなのだが、コミュニケイションという場合、そこにはあきらかに伝達の意図が含まれている。言語についていうなら、人がことばで何かをしゃべるということは、当然何かの意味を伝えたいという意図を含んでいるはずで、[2]寝言においてすら、ことばは伝達志向をもっているはずだ。何の意味もない音声を突然口ばしるというものではない。そして、言語に限らず、そういうコミュニケイションの意図をもって発信されるもののみが記号だというのだ。

ところで、空の雲を見て近づいた雨もようを読み取る、足跡から逃亡者のゆくえを読み取る、という場合がある。とすれば、「雲」が《雨》の記号であり、「足跡」が《逃亡者》の記号だといえなくもないが、プリエト流に考えるなら、空が《雨》を伝えようとして「雲」を提示しているわけじゃあるまいし、そんなものは[3]指標であっても記号とは呼べないということになる。ギャングは「足跡」という記号で追手に通信を送っているわけではないのだ。

さて、意図のあるなしで記号という称号を許すかどうかという用語問題はさておくとして、「知覚可能な事実(足跡)から別

の意味内容(逃亡者のゆくえ)を読み取る」ことができるという点で、これらの指標が一種の記号性をもっていることは否定できない。それらをも仮に記号と呼ぶとすると、人は意図的に発信されなかったものをも記号として受信することができるということになる。

人は、単なる事実を「読み取る」ことによって記号化する。

この簡明な事態は、意外に重要である。コミュニケイション過程において、とかく「発信」と「受信」は可逆的な等価の作用であるかのように扱われがちで、[4]《発信意味》＜《受信意味》という不等式を、等式として見あやまることが少なくない。われわれは自分では発信していないメッセージをも受信されているのだ。その量は発信されたまま受信されずに無効化するメッセージよりはるかに多いと考えておいたほうがよい。

自動車の運転者が、進行方向前方に、横町からころがり出したボールを発見したとする。多少キャリアのある運転者なら、《そのボールを追いかけて子どもが飛び出して来るかもしれない》という危険を読み取るだろう。ボールは、発信されたのではないが、読み取られることによって記号化する(話は別だが、そのあとで運転者が「クラクソン」を鳴らし、子どもがそれを聞いたなら、[5]そちらは本来の記号だということになる)。

プリエトは、意図的な記号を扱う「コミュニケイションの記号学」と、どんな事実からも読み取りうる意味作用を扱う「意味作用の記号学」とを区別し、自分たちのそれは前者だが、ロラン・バルトなどの記号学は後者だ、といった。ところで、よく考えてみれば、実は、前者は「発信の記号学」で後者は「受信の記号学」なのだ、といったほうがいい。そして、「顔色を読む」というようないいまわしからもわかるとおり、[6]身ぶり言語はおもに「受信の記号学」の対象だと考えてよさそうである。

身ぶり言語は非言語的コミュニケイション(意図的であろうとなかろうと)の手段の一種だ。そのような非言語的伝達手段を「言語」と呼ぶことに対して、ジョルジュ・ムーナンのような潔癖な言語学者はあからさまにいやな顔をする。つまり、言語と呼ばれるに値するものはまさに本来の言語・音声言語だけであるというのだ。そのいいぶんはそれなりにもっともだけれども、新しい関心領域にたずさわろうとするなら、潔癖派がいくら用語の貸し出しをしぶっても、彼らの癇にさわるのを承知の

上で用語の乱用をしないわけにはいかない。古来、新しい関心領域に登場する対象はまだ名前をもっていないのが理の当然で、だから既存の関心領域から比喩的に用語を借用して乱用するか、さもなければ新造語を乱発するか、いずれにしても用語公害をいくぶんかひきおこさないわけにはいかないのである。プラスチックや金属性の吊り革が電車に使われはじめてからも、本革でないからという理由で[7]「吊り革」の称号を禁じるわけにはいかなかっただろう。

（佐藤信夫『レトリック・記号ｅｔｃ.』）

〈注〉 ルイス・プリエト…二十世紀の記号学者　　クラクソン…（車の）クラクション
ロラン・バルト…二十世紀の記号学者　　ジョルジュ・ムーナン…二十世紀の言語学者

問一　傍線部1〈「身ぶり言語」についてもまた「言語」をひきあいに出して考えると好都合なのだ〉とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　身ぶりは、それ自体が姿や動作で視覚的な内容を伝えているが、それは言語に匹敵するほどの情報量はなく、やむを得ず、言語として扱うほかない。

b　身ぶりは、それが仮に何か内容を伝えるとしても、それ自体は言語ほど明確な基準をもたない以上、言語の伝達の仕方に引き寄せて理解する方がよい。

c　身ぶりは、映像や花のように、それ自体は視覚的風景にすぎず、更に言語で表現しなければならないという制約がある以上、言語として扱わざるをえない。

d　身ぶりは、映像や花のように、いつも比喩的に表現されるものであるから、表現の基準となる言語の助けを借りて表現していくことが望ましい。

問二　傍線部2について「寝言においてすら、ことばは伝達志向をもっているはずだ」と「記号学派」の考えを持ち出しているが、この時、筆者はどのような視点に立っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　寝言は、伝達の意図を一切含まないものであるとしても、それに一定の意味を読み取りうる人が居るから一種のコミュニケイションであるとする視点。

b　寝言は、たとえそれが無意識下のことであるにしても、コミュニケイションを目的にしたことばであると徹底して考えなければならないとする視点。

c　寝言は、何の意味もなく口走ったことばであるのではなく、一定の意味あることばとして、伝達とは別に認める余地を残しておくべきであるとする視点。

d　寝言を発する人にとって、そのことばは無意識のものであり、そこにコミュニケイションにおける伝達の意図を見いだすのはとても難しいとする視点。

問三　傍線部3「指標であっても記号とは呼べない」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　記号とは意図を伝達するものである以上、人間的意志をもたないと考えられる自然現象に意図の伝達があるかのように見なすわけにはいかない。

b　記号とは、コミュニケイションを目的とするものであるが、「雲」や「足跡」に意味を読み取ることもまたコミュニケイションの指標となる。

c　指標とは、「雲」から「雨」が降ることを読み取ることのできる一種の記号であるが、少なくとも自然が意味を伝達していると見ることはできる。

d　指標とは、意志をもたない自然現象が一定の意味を発信するが、それを敢えて意図をもたないものとして受信させるはたらきをもつものである。

問四　傍線部4〈《発信意味》＜《受信意味》という不等式〉とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　記号の意味は、常に発信者の意味とは異なる意味となって受信者に解釈され、二つの意味がバランスを欠いたものとなっている。

b　発信された記号について、発信者の意図の内容は、受信者にはほとんど伝わらず、受信者側で自由な解釈がされている。

c　発信された記号について、発信する側の意図の内容量よりも、受信する側の記号解釈の内容量の方が一層豊かで多い。

d　発信もしていない意味が、あたかも発信したかのような扱いが受信者側によって為されることで、メッセージが無効となる。

問五　傍線部5「そちらは本来の記号だということになる」とあるが、なぜ「本来の記号」であるのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　運転者が、ボールを見て警戒心をもち、ボールの出現の意味を十分に受信したとして音を鳴らしているから。

b　運転者が、本来意図をもたないボールに対して、警戒心から子供の出現という意図を自ら読み取ったから。

c　運転者が子供に対して、あらかじめ注意してほしいという意図を込めて音を鳴らし、その音を子供が聞きとったから。

d　飛び出したボールは運転者にとって子供の出現の記号であり、さらに「クラクソン」も子供の出現の記号であるから。

問六　傍線部6〈身ぶり言語はおもに「受信の記号学」の対象だと考えてよさそうである〉とあるが、この「対象」について筆者はどのようなことを考えているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　他人の顔の表情は、顔を見ながらも、表情の発信者の実際の意図とは別に、顔の表情そのものを解釈するといった仕方で読み取られる対象となる。

b　他人の顔の表情は、顔を見ながらも、実は相手の内面を読み取ろうとする対象であって、そこから相手の内面の喜びや悲しみのあるがままが受信される。

c　「顔色を読む」という表現は他人が発信した顔の表情の受信を意味する比喩的ないいまわしであり、受信の対象の比喩的性質をよく表している。

d　「顔色を読む」から分かるように、顔の表情が非言語的コミュニケイションの対象である以上、言語的対象のように「読む」ものと考えてはならない。

問七　傍線部7〈「吊り革」の称号を禁じるわけにはいかなかっただろう〉とあるが、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「吊り革」は、実態と異なる誤った用語であるが、このような正誤の問題は、ことばの慣用の現実からすれば容認せざるをえないから。

b　「吊り革」は、既に素材が変更されても使用されるほど社会の中で「称号」と化しているので、それを尊重しなければならないから。

c　「吊り革」という名前は、用語公害の一つと言うべきであり、本来は名前としては不適切であるとはいえ、禁止よりも対策が必要であるから。

d　「吊り革」は、以前は素材と一致した文字通りの名前であったが、その後、比喩的な名前として認められ、むしろ正当な名前となったから。

問八　筆者は「身ぶり言語」についてどのように考えているか。その考えとして、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「身ぶり言語」は非言語的コミュニケイションであるからこそ、徹底して非言語的な意図の読み取りを果たすべき役割をもっている。

b　「身ぶり言語」は明らかに「言語」ではない。従って名称も誤っているが、用語公害を防ぐためには、潔癖な態度はとるべきではない。

c　「身ぶり言語」は、本来は受信の記号学に属するものである。従って発信者の意図を読み取る必要のない言語の記号化作用をもつ。

d　「身ぶり言語」ということばは非言語的コミュニケイションをあらわす名称であって、言語を基準にする以上、用語の是非は問うべきではない。

問九　本文の内容と一致しているものはどれか。次の中から二つ選べ。

a　記号学が合理的であろうとすると、どうしてもコミュニケイションの場を考え、記号学の領域では常に発信者の意図のみが問われることになる。

b　「身ぶり言語」が言語それ自体ともっとも異なっているのは、受信した側で読み取る意味の量が多いという点である。

c　発信と受信とは、その意味の量という点では本来等しくあるべきであって、そのバランスこそがコミュニケイションを確実にする。

d　意味を伝えたいという意図はコミュニケイションにおいてはもっとも重要であって、この考え方を身ぶり言語にも正しく適用すべきである。

e　潔癖な言語学者は、言語の概念について厳しい見方をとるから、用語公害に対しては用語の使用禁止を訴える結果となっている。

f　「意味作用の記号学」は事実を記号として読み取ることを求める記号学であり、発信者の発信の意図を対象とはしない。